

むしろ三島由紀夫に近い「憂魂 菅原文太」の曇りのない姿勢

高倉健はなぜ、三島由紀夫を演じる気になったのだろうか。横尾忠則の追悼文からはその問いは出てこない。私見では、三島から鶴田浩二と比べると、「ただのデク人形」と評されたこととかかわっている。いうまでもないが、三島は鶴田の演技力と比較して高倉の演技力を評して、「ただのデク人形」といったわけではない。鶴田の演技には演技以前の人生の苦渋といったものが滲み出てくるが、高倉の颯爽とした演技はいくら格好よくても、そしてその格好よさが観客に受け入れられようとも、そこには人生の悲哀とか屈折した心情といったものが欠けている。自分は格好よさよりも屈折した悲哀のほうを上へ置く。屈折した悲哀が滲み出てこない格好よさなんか、「ただのデク人形」ではないか、といていたのである。私は当時も、今もそう受けとめて納得していた。

では、演技以前の人生の苦渋といったものはどこから滲み出てくるのか。もちろん、人生の苦渋はその俳優の生きてきた歩みからやってくるのである。彼がたとえ人生の苦渋などとはほど遠い喜劇を演じていても、その喜劇にどうしてもなく俳優が実人生で嘗てきた苦渋が投影されずにはいられず、その苦渋によって喜劇が台無しになるどころか、逆にスパイスのように喜劇の奥行きが増していくことになるのだ。鶴田を称讃した映画『総長賭博』でもし鶴田の代わりに高倉が演じていたとすれば、多くの観客が同じように観ていたとしても、三島が称讃することはなかったのは目にみえている。やはり鶴田浩二でないと、「雨の墓地のシーンと、信次郎の松田殺しのシーン」は苦渋の重みに耐えることはできなかったにちがいない。

三島は鶴田にあって高倉にないもの、要するに、戦中派の宙ぶらりんの人生の屈折した悲哀についていおうとしていたのだ。世代的に戦中派ではない、その年下世代である高倉は代わりに、鶴田ではどうしても出せない俳優としてのストレートな格好よさをさらけ出すことができた。しかし、三島からすれば、そんなストレートな格好よさは「ただのデク人形」にすぎなかったのだ。だからといってどうすることもできない高倉にとっては、酷評であることに変わりはないが、彼は三島がいうように自分が（俳優として）「ただのデク人形」であることを自認していたようにみえる。おそらく自分も自分の演技も「ただのデク人形」として受けとめようとしていたのかもしれない。

映画の中でも外でも同じように《礼儀や礼節を大切にする》高倉健であることに、「ただのデク人形」を感じてはいなかっただろうか。高倉健といえど、いつも同じような役をあてがわれることに自身がうんざりしていなかっただろうか。少なくとも私は観客の一人として、高倉健が映画の中でいつも高倉健を演じようとしていることに満足はしていなかった。

横尾もいうように、三島もまた《礼儀や礼節を大切にする》人であった。しかし、三島は最期に《礼儀や礼節》の枠から飛び出して、最大の非礼的な事件を引き起こして自決した人物であった。《礼儀や礼節を大切に》したまま、生涯を終えた人物ではなかった。高倉健は自分を「ただのデク人形」と評し、《礼儀や礼節》とは正反対の愚行へと足を踏み出した、そんな人物を演じてみようとしていたのである。

横尾の追悼文からも窺われるように、その企画は彼自身が立てたものであった。つまり、彼にとっては外から持ちこまれることなど想像もできない企画であった。そのような企画を彼はたぶん自分のために実現させようとしていたのであろう。自分を「ただのデク人形」と評した人物をどこまで演じることができるかによって、彼は三島に応答しようとしていたのかもしれない。だがそのこと以上に彼にとって重要なことは、高倉健をスクリーンで演じる「ただのデク人形」との訣別を彼自身が意図していたかもしれないことである。残念なことに、その企画は潰えた。新たな領域に翼を広げることができなかったことによって、彼は高倉健の外に出ることを封じられてしまったのではないだろうか。

『昭和45年11月25日—三島由紀夫自決、日本が受けた衝撃』（幻冬舎新書）には、三島が映画『総長賭博』を称讃したことで、鶴田と三島が個人的にも親交を温め、週刊プレイボーイで対談を行ったことが紹介されている。

《…1969年、鶴田と三島は「週刊プレイボーイ」7月8日号掲載の対談で、初めて会い、すっかり打ち解けた。三島が映画雑誌で鶴田の出た『総長賭博』を絶賛したのだが、そのきっかけとなった。当時、東映のヤクザ映画はまともな映画評論の対象でなく、三島のような高名な作家が論じたこと自

体が話題になり、鶴田は感激していたのだ。二人は、ほとんど同年齢だった。三島が1925年1月14日生まれで、鶴田は1924年12月6日生まれだった（引用者註－因みに吉本隆明は1924年11月25日生まれで、三島が自決した日は吉本の46歳の誕生日であった）。しかし、鶴田は学徒出陣で軍隊経験があるが、三島にはない。対談は、こう結ばれる。

鶴田 僕はね、三島さん、民族祖国が基本であるという理ってものがちゃんとあると思うんです。人間、この理をきちんと守っていけばまちがいない。

三島 そうなんだよ。きちんと自分のコトワリを守っていくことなんだよ。

鶴田 昭和維新ですね、今は。

三島 うん、昭和維新。いざというときは、オレはやるよ。

鶴田 三島さん、そのときは電話一本かけてくださいよ。軍刀もって、ぼくかけつけるから。

三島 ワッハハハハハ、きみはやっぱり、オレの思ったとおりの男だったな。

しかし、決起の時、三島は鶴田には電話をかけなかった。村松英子は著書で鶴田浩二のこんな言葉を紹介している。〈三島先生が亡くなった時、僕はやむにやまれぬ気持ちで日本刀を抜いて、号泣した。〉

他方で、《三島の自決を知った鶴田は「生きて戦ってこそ男じゃないか」と家族に語り、書棚から三島の書籍を遠ざけた》ともされている。

さて、映画でも高倉健を演じつづけた高倉と違って、自由に役を演じた二歳年下の菅原文太も心に残る俳優である。評論家の川本三郎は高倉健と菅原文太の追悼文（『新潮45』15.1）で、高倉健と違って生前に会えた菅原文太について、《映画のなかでは荒っぽいやくざを演じるスターは、実生活では、優しく、律儀だった》という。文太といえば、なんといっても映画『仁義なき戦い』であると思われるが、シリーズの第三作『代理戦争』（73年）の最後の場面についてこう書いている。

《文太の弟分、渡瀬恒彦が殺される。骨焼きが行なわれる。そこを敵に襲撃され、骨壺が壊される。骨が飛び散る。子分たちが拾おうとするが、まだ熱くて拾えない。文太ひとりが熱い骨を拾い、ぎゅっと握りしめる。》そして、《この時は、菅原文太が高倉健と重なった。》と結ぶ。

しかし、映画の外では俳優のイメージを裏切って、というより映画の中のイメージそのままに、《熱い骨を拾い、ぎゅっと握りしめる》文太が自由に行動し、発言する姿が方々で見られた。たとえば、小学館のPR誌『本の窓』（12月号・12.1）の連載対談〔第13回〕で1933年生まれの文太は、二回り年下のジャーナリストの吉田敏浩を相手に、自分が映画で俳優をしている間に、日本で自分の知らないことが次々に起こっていることに驚きの声を素直にあげている文太の直立した姿勢が見られる。

「吉田さんの本のタイトル、『人を“資源”と呼んでいいのか』という言葉に、目を見開かされた気がしたんです。これは見捨てておけない言葉だ」と冒頭から率直に語りだす文太は、「戦争が起って自衛隊と米軍が共同行動をとるときに、たとえば水の供給やゴミの処理などを自治体が支援する、米軍の艦船や飛行機に港や空港などを提供する、燃料や食料などの運送にJRや私鉄ほかの交通機関や海運・陸運業者が協力する」、協力せざるをえない（吉田）という「米軍行動円滑化法」が、2004年の有事法制の一つとして成立していることに、『本当かね?』と非常にビックリした」といい、日米安保条約と共に結ばれた1952年の日米行政協定では、「占領時代にアメリカが得た特権を事実上継続できるような仕組みをつくりあげ」（吉田）ていることに、アメリカが基地を置いている他の国々の現状や比較などを次々と尋ねる。

「アメリカ側に非があったと非難されるような事態を防ぐため」に、「合衆国の利益を害すると認められたり、軍事機密に属する場合には、情報を提供しなくていい」という秘密合意もできている（吉田）ことに、「そういう日本の姿勢、人間としての気概みたいなものを日本はアメリカに対して持てずにきた。」ことを憂う文太に、そのような問題意識を抱く理由を吉田が訊くと、「いや、つい最近までは物事を報道通り、額面通りに受け取ってきた。でも、ここ何年かな、いろんな戦後のひずみが沸々として猖獗^{しょうけつ}を極めていくというのか、そういう状況になって初めて、『待てよ』と。『本当にそうなんだろうか』と物事の裏を考えるようになり、「そこまで国民はなめられてきたのかという憤りがある」と語り、サッカーや野球やイベントなどには「何万という人々が集まってくる」状況に、「オレだけなのだろうか、敏感になっているのは。」と率直に口にする。

「人的資源」という言葉に自分も「資源とみなされてきた」ことや、若者が「会社のための消耗品」、戦争のための消耗品」とされつつある世界の状況に真っ直ぐに目を向けようとする文太の姿勢こそ、むしろ三島由紀夫に近い「憂魂 菅原文太」に思われてくる。私はそんな文太が気に入っている。